清教学園創立70周年　　2021年10月

# 「東京2020に想う澤田啓祐先生のこと」

理事長・チャプレン　井上 良作

兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

（フィリピの信徒への手紙3章12～14節）

2021年夏、新型コロナウイルスの感染拡大によって1年延期された東京五輪・パラリンピックが開催され、大会前の様々な懸念にもかかわらず、多くの感動を生んで無事閉幕されました。東京は夏季パラリンピック大会が２度開催される世界で初めての都市となりました。パラリンピック閉会式を取材した海外メディアの記者たちは、「障害のある歌手が唄う『この素晴らしき世界』に感動した。コロナ禍の世界に一筋の希望を感じさせた」、「日本文化や多様性を感じる温かい内容。共生社会を体現した」、「全会場に多くの通訳がいて言葉が通じない選手にも取材できた」、「ボランティアの働きぶりは称賛に値する」、「（感染対策について）大会中はずっと安全だった。東京到着前は想像できなかった」と口々に高い評価を報じました。しかし、ある盲目のブラジル人カメラマンは「会場周辺は段差が多く点字ブロックのない場所もあり、ボランティアが手伝う場面が目立った。助けがなくても障害者が過ごしやすい街が理想。改善が必要と感じた」と課題も指摘していました。そして、国際パラリンピック委員会（IPC）のパーソンズ会長は “We love you, Japan!” と声を張り上げて閉会を宣言し、「新型コロナ禍を考えると、日本が行ったような大会開催は諸外国ではできなかったと確信している。世界は日本が果たした役割を決して忘れない」と述べました。これらが国際社会を代表する、東京2020に対しての評価の声でありました。

これらのことは医療現場で働く人々の多大な犠牲と貢献と、日本社会のすべてにおいて感染拡大を防ぐために人々が努力したこととがあって実現したことだと思います。昨年度から学校生活は大きく変わりました。たくさんの学校行事や部活動の大会等を諦めなくてはなりませんでしたし、通常の授業までも様々な制限が課せられてきました。しかし、私たちはただ単に我慢を強制されて過ごしてきたのではなく、こうして国際社会から高く評価され本当に感謝される結果にも繋がったのだということを東京2020の記憶として留めたいと私は考えます。

パラリンピックの発祥は、英国の神経外科医だったルートヴィヒ・グトマン医師が1984年にロンドン郊外のストーク・マンデビル病院で開いたアーチェリー大会だとされています。聖書を知るユダヤ人であるグトマン医師は、第二次大戦中に負傷し車椅子生活となった退役軍人らに「失ったものを悔やむよりも、今あるものを最大限に生かすことにフォーカスしよう！」と励ましてスポーツによるリハビリテーションを勧めたのでした。パラリンピックを生み出すモットーとなったこの言葉は、今月の聖句として挙げた新約聖書の使徒パウロの言

（次ページに続く）

葉が教えている聖書の人生観から来ているものでしょう。このストーク・マンデビル病院に日本から留学していた中村裕医師は、障害者が活発にスポーツに取り組み生き生きとしている様を見て衝撃を受けました。当時の日本では障害者は病院でひたすら安静にして看病されるだけの存在でしたが、そこでは全く違っていたのです。中村医師はこれを日本に導入することを使命として働き、ついには1964年の東京五輪で第2回パラリンピックが開催されたのです。

少年時代の澤田先生

今年、清教学園は創立70周年を記念しています。1951年4月に清教学園中学校が河内長野に開校しました。そこに至る創立の歴史を、生徒のみなさんは大谷美和子さん著の小説『青春輪舞──清教学園物語』で読み知っているでしょう。主人公の清教塾教師、山村耕平は清教学園創立者の中山昇先生であることも知っていると思います。今回は、もう一人の主人公と呼んでよい、清教塾生で中学校設立運動のリーダーであった田川誠少年のことをお話します。田川少年はその後、どんな大人になったのでしょう?

晩年の澤田先生

田川誠のモデルとなった澤田啓祐さんは河内長野・高向の村で育ちました。中学校設立運動の中心でしたが、学校ができた頃にはすでに高校生となっていて自身は清教学園の生徒となることはできませんでした。少年時代、村で大怪我をして困っている人を見て医師になることを志しました。そして、最新の手術を追求する整形外科医として医療現場の第一線で活躍されました。しかし、40代になった頃、日本の、とりわけ大阪府の障害者福祉行政が立ち遅れていた事態を目の当たりにして、澤田啓祐先生は最先端の整形外科医の立場を惜しむこと無く、障害者福祉行政に働きの場を変えました。とても快活な先生は障害者の方々を大勢海外旅行に連れて行くなどして、福祉行政に大きな変革をもたらす先駆的な働きをされました。1964年の東京パラリンピック大会開催の原動力となった中村裕医師と理念や情熱を同じくしていたのが、澤田啓祐先生でした。

大阪府福祉行政から退かれた後には、清教学園理事長として学園教育をリードされました。大変残念なことに病に倒れられましたが、河内長野教会で営まれたご葬儀には数千人の参列者が、その中には障害者の方々もたくさん集まってきました。その光景は、先生がいかに多くの人々に影響を与え慕われていたかを現していました。

「賜物を生かして互いに仕える」という学園教育のモットーは、無いことできないことを悔やんだり嘆いたり羨んだりする生き方ではなく、「神様は確かに賜物を与えてくださっている」と感謝して受け入れて、自分にできることを周りの人の幸せに貢献するためにすすんで用いていくスピリットであります。このスピリットを澤田啓祐少年から始まって学園の門をくぐったみなさんすべてが受け継いでいるのです。みなさんが与えられた賜物を一つでも多く見出し磨き合っていく青春時代をこのキャンパスで過ごしていただくこと、それが創立から変わらぬ清教学園の願いです。